

シベリア出兵におけるスペイン・インフルエンザの問題

井 竿 富 雄

はじめに

- 一 スペイン・インフルエンザの流行―山口県の場合
- 二 シベリア出兵の前線におけるスペイン・インフルエンザ
- 三 どのように対処するか？

小括

はじめに

本論文は、シベリア出兵期に重なった大事件である、スペイン・インフルエンザの大流行とシベリア出兵との関係について考察していくことを目的とする。

スペイン・インフルエンザは、通称「スペイン風邪」と呼ばれた新型インフルエンザである。一九一八年から一九二〇年ごろにかけて大流行し、大量の死者を出した。地名が冠せられているがスペインが発生源ではなく、スペインが疾病発生を最初に公表したことからこう呼ばれているようである。海外においての研究で、著名なものは日本でも翻訳されている^①。

この病気は、日本も例外なく流行した。大量の死者を出し、社会を混乱に陥れた。そのことについては、歴史人口学の重鎮速水融氏の研究がある。実は速水氏が研究するまで、日本ではほとんどスペイン・インフルエンザについての研究がなかった^②。むしろ海外で、関東大震災以上の死者を出した大惨事でありながら日本に目立った研究がないことを指摘していたほどであった^③。速水氏はこのような指摘を知り、当時の新聞報道や海外の医学論文などを精査し、当時のインフルエンザ流行状況を写真しようと試みたのである。ところが、速水氏

の研究においては、当時大事件であったシベリア出兵とインフルエンザについての関係は、現地からの新聞報道によるところまでにとどまっている。また、山口県については集められる史料に制約があり、うまく行かなかった旨述べている。しかし、近年当時の患者を診察したカルテの発見があった^④。その上新型インフルエンザが世界的に流行したことをきっかけにして、日本の内務省が作成した同時代の公式報告書『流行性感冒』が再発見された^⑤。このことが研究の前進に寄与した。

今回本論文では、先行研究が入り込めなかった「シベリア出兵とスペイン・インフルエンザ」の問題を、先行研究が精査できなかった山口県のインフルエンザ流行状況とあわせて考えてみたい。シベリア出兵と医療の問題では、後述するように公式の歴史が編纂されていた。また、いくらか当時の軍医が書き記したもので、最前線での軍医とスペイン・インフルエンザとの闘いの様子なども知ることができた。山口県については残念ながら新聞史料に頼らざるを得なかったが、山口町で発行されていた『防長新聞』や、下関市で発行されていた『馬関毎日新聞』『関門日日新聞』を見ることで、同時代的な「書き方」を通じたインフルエンザ流行状況を知ることができる。まずは山口におけるシベリア出兵の流行状況を概観し、その次に、シベリア出兵の最前線での流行と対策について検討する。第三に、このようなスペイン・インフルエンザの大流行に対して、現場と政治の世界での対応について扱っていく。ここでは、現場と政治の世界との間で認識のギャップがあったのではないかとということについても指摘する。

一 スペイン・インフルエンザの流行―山口県の場合

先述の、内務省衛生局の公式報告書『流行性感冒』⁷⁾は、スペイン・インフルエンザの流行開始について、以下のように述べている。

「今回の「インフルエンザ・パンデミー」は其の源を何処に発せしや全く不明にて、且つ其の伝播の径路も不明に属す。蓋し流行の始まりし時は恰も世界大戦の最中にして各国共に国境の通信を監視し、悪疫蔓延等の不利なる報道は之を明白にするを避けたるべく、又戦乱の結果は世界各地の交通、状態極めて錯雑し、其の伝播の径路を複雑且つ迅速ならしめたるの観あり。若し大正七年春期に於て世界各地に認められたる軽微の加答児性気道疾患が果して「パンデミー」の前駆なりとせば、其の病毒の発生並に伝播は既に久しく隠微の間に行はれしものにして、之を追究せんこと不可能なり」

この時点では、インフルエンザの発症がいったいどこから始まったものなのか、全く分かっていなかった。スペインの名前が付けられたのも、特にスペインが発症地だったからではないことはよく知られている。第一次世界大戦中という时期的な問題があったため、各国は衛生状況などを公表しようとしなかった。そのため、流行に関する情報も伝達が遅れてしまい、対応のしようがなかったのである。

速水氏の先行研究では、日本全国の流行状況についてのリサーチを進めようとしていたが、山口県については十分に調査が及ばなかったことが記されている。また、一部では地方の流行状況についての考察も出ている。⁸⁾ここでは、先行研究があまり言及していなかった山口県における流行状況を、同時代に山口町（現在の山口市）で発行されていた新聞『防長新聞』から抽出してみたい。報道の中には、県当局の対応や、地域の状況などが垣間見えるものもある。新聞記事だけでは、社会的な分析とは到底言い難いのだが、一つの試みとして行っていくことにしたい。⁹⁾

山口県でインフルエンザについての報道が出るのは、一九一八年一〇月のことである。速水氏の研究では、厚狭郡高千帆村（現在の山陽小野田市）での小

学生大量発症を挙げている。¹⁰⁾これは、同村の小学校低学年の複数生徒が鼻血と発熱で倒れたという事件である。そして、山口の新聞を見ると、その少しあとに山口町の山口中学校で二三人という大量の発症者が出ていたことが報じられている。¹¹⁾山口県当局は学校を閉鎖し、消毒した。学外から通勤していた寄宿舎の関係者は学校に留め置かれることになった。自宅から通学している生徒は自宅待機を命じられ、寄宿生は実家へ帰宅させられた。生徒の保護者は、生徒が帰宅したら帰宅日時を学校に報告させることが命じられるほどの徹底ぶりであった（おそらく寄り道をさせないためであったと考えられる）。山口中学校の校医飯田文男は新聞に、高千帆村の流行のことを考えると、「或は今後本病の一大流行―少なくとも目下よりは一層厳しい局所流行を諸所に來たすかも計られない」と厳しい見通しを語っていた。その上、飯田医師は「即ち本病の予防に就ては特記すべきほどの事はないといつて宜い」と話している。同時代の医学の水準からすれば、これはあきらめにも近い発言であった。¹²⁾インフルエンザの発症は、山口中学校から山口町内の別の学校にも拡大し、師範学校附属小学校、山口高等商業学校、鴻城中学校、国学院中学校（神職の養成学校。後河原にあった）、山口女学校、村尾裁縫女学校、中村女学校、大殿小学校に感染者が拡大していった。また、高千帆村では一度県から派遣されて消毒などが行われていたにもかかわらず再び感染が拡大している、という記事も出ている。¹³⁾このころから、『防長新聞』は、「各地の流行性感冒」という欄を設け、県内各地のインフルエンザ情報を掲載するようになった。医学の水準からすると今では怪しいものも含まれているであろうが、同時代の病気に對する恐怖感などをよく伝えていると考えられる。

紀伊寛平・山口県警察部長は談話を発表し、厚狭郡が最初のインフルエンザ発症地ではないかという予測を示したうえで、人の集まる場所には出かけないようにと述べた。¹⁴⁾しかし、もはや流行はとどめようがなかった。県のトップである中川望山口県知事までが発病し、大量感染が報じられた山口中学校では死亡者が出た。¹⁵⁾一月には石川太郎県衛生課長名で談話が出され、「氣候の変化に伴ひ更に一層流行劇甚ならんとする傾あるを以て」、各人が注意するようにと呼び掛けていた。この談話では、人々に対して具体的に「急性、熱性患者発症の場合には速に入室（一字抜け）隔離し医療を求むべし」「患者の咳嗽噴嚏其他談話等の際鼻汁唾痰の飛沫に依り鼻口腔より病毒を感受する虞あるを以て患

者に接近する場合は之等の点に注意する事」「成べく此際密居群を避くる事」など、八項目の注意事項を挙げている。¹⁷⁾

しかし感染拡大の勢いはすさまじかった。この時点ではまだ予防接種のワクチン(後述のように、医学的効果は全くなかったのだが)も存在しないため、「かからない」以外に病気を逃れる方法がないという状態であった。また、かかったとしても、今のようなインフルエンザ対処の薬もなかった。新聞紙面は多少過剰気味に報道しているのかもしれないが、やはり打つ手のない伝染性疾患に對する人々の周章狼狽ぶりは本当のことではなかっただろうか。実際に、県内ではインフルエンザで新聞発行が止まった事例も存在する。¹⁸⁾一九一八年一月の報道を見ていきたい。

佐波郡ではなぜかインフルエンザが「乙女風邪」と呼ばれ、家々に「久松をらぬ」という張り札がされていた。¹⁹⁾とりあえず発熱した患者への対処のために、初冬の時期には異例なほど氷が売れ、アスピリンが薬屋の店頭から消えた地域があった。解熱剤にはミミズが効くという記事が出た。防府の三田尻警察署では高熱で言葉を話せなくなった若者が保護され、吉敷郡宮野村では担当医師がインフルエンザを発症し村人は治療を受けられなくなってしまった。²⁰⁾中には、旅芸人を泊めたところインフルエンザを発症したので、家主の妻が恐怖して、人に頼んで病臥している旅芸人を家の外に放り出すという事件まで発生した。²¹⁾

このような事態に直面して、県は「流行性感冒予防に関する件」を発し、「密居群集」の禁止、「劇場寄席活動写真等諸興業場」で、咳をしているもの、のどに異常があるものは入場させないようにすること、「宿屋料理屋等客の出入りする場所に於ては寝具食器等の消毒(日光消毒)を励行せしめ痰壺の設備を周到ならしむること」、そして、神社での神事は行ってもよいが、「神幸式又は余興の類は可成本病終熄後に於て執行すべき旨」通知した。²²⁾この措置に伴い、防府と山口の天神祭は延期されることになった。²³⁾

だが、病気の流行は、行政機能すら冒していた。衛生行政の一端を担っていた警官が病死し、山口町の役場は大量の感染者が出たため「全く空巣の如く」という状態に陥った。²⁴⁾玖珂郡では郵便局の全職員が感染し、通信業務が完全に停止した箇所が出現した。²⁵⁾阿武郡生雲村では裁判所出張所、村役場、郵便局の全職員が感染し、地域全体の行政機能がマヒした。²⁶⁾防府では町会で緊急のインフルエンザ対策予算(具体的には治療)を可決しようとしたが議員が倒れて定

足数に足りず一度では開催できないという惨状だった。²⁷⁾この他にも、官吏のインフルエンザによる訃報の記事が紙面には散見される。一月末時点で、山口県は「死亡三千七百人 罹病者四十万」と言われるほどの感染拡大を見たのであった。²⁸⁾

このように、山口県一つを取った場合でも、スペイン・インフルエンザの猛威はすさまじいの一言に尽きた。行政機関は住民に衛生改善等呼びかけ、住民は感染・発病を防ぐための措置を講じた。咳エチケットや消毒、発症した場合の安静などは今と全く変わらないが、これ以外に何もしようがなかったのも事実である。行政機能の停止などは、もし毒性の強い新型インフルエンザが行すれば、二一世紀の今日においてもありえないとは言えない危機的な事態である。ここでは最初の流行を追いかけるとどまったが、翌年にしても病原体が明快に分かっていただけではなかったから、これに予防接種が加わる程度のもものではなかっただろうか。

さて、このような国内よりもはるかに衛生環境のよくない、シベリア出兵の前線では、流行するスペイン・インフルエンザに対して、当時の日本軍はどのように対応したのだろうか。次節ではこのことについて考えていきたい。

二 シベリア出兵の前線におけるスペイン・インフルエンザ

先行研究でも知られているが、シベリア出兵の前線でインフルエンザが流行していたことは分かっていた。しかし、内務省の報告書は、シベリア出兵の舞台であったロシア・シベリアについては、以下のような簡潔な記述しか載せていない。²⁹⁾

「大正九年一月二十八日発浦塩駐在日本領事の報告によれば昨年十一月初旬より十二月初旬にかけて患者多数発生したるも死亡率割合に低く日本陸軍部隊は発生当時より一月末日迄の患者千三百名死亡六十八人にして海軍側目下死者なし。

地方は昨年十一月末以来流行なし、市内に於ては目下下火と認めらる大正八年末の患者も内地よりの渡航者に多かりしは事実なり。

ニコラエウスク及ペトロパブロフスクよりの二月初旬に於ける報告によるも

該地方には流行性感冒の流行は未だ一回も認めざりしと云ふ」

しかもこの記述は一九一九年から一九二〇年にかけてのものであり、シベリアにいた日本人居留民の感染状況だけである。インフルエンザがシベリア出兵の前線のように蔓延していたか、ここからではわからない。

本節では、シベリア出兵におけるインフルエンザ流行状況を、当時まとめられた史料から確認したい。ここで用いるのは、シベリア出兵での戦傷・病氣の実態を調査しまとめた史料『西伯利出兵衛生史』³⁴である。全容を完全に確認したわけではないので不十分な調査にとどまっているが、この史料が章を割いて記録しているスペイン・インフルエンザの様子について述べていきたい。また、軍医が書きとめた手記の一節なども、必要に応じて利用してみたい。

数字から述べていくと、シベリア出兵（発動から一九二〇年ごろまで）におけるインフルエンザの患者数は一二三三二人であったと記されている。戦傷・病患者は一〇四九五四人であったと述べられ、多いのは栄養器疾患（二三四二四人）や急性胃腸炎（二〇六四七人）であったから、順位としては高くない。しかし、シベリア出兵は直接の戦闘が少ないため、負傷者の数（二六二五人）からすると格段に多いのである。陸軍の衛生史に関して言えば、日清戦争でも日露戦争でも、インフルエンザについて章を割いたことはない³⁵。この時、インフルエンザは重大な疾患の一つであったことがよくわかる。

日本陸軍の中では、まず一九一八年春に最初の流行があったという。このときも死者は出たのだが、「病勢漸次悪化シ死者続出スルニ至リシハ実ニ第二回ノ流行ニシテ十月上旬ニ始マレリ」とある。一九一八年一〇月といえば、山口県で流行が始まったのと同時期である。そして、将兵が赴くシベリアについては、「西伯利方面各地ニ於テハ我国内地ノ流行ニ先シテ同住民間ニ流行シアリシヲ想像スルニ難カラス」とあった。現実には、一九一八年一〇月には、シベリア鉄道沿線で住民の間に流行が始まっていた³⁷。この年に派遣されていた部隊は、第一二師団、第三師団、第七師団であった。例えば第一二師団の場合、インフルエンザが疑われているものは前線に連れて行かないなどの措置が取られ、移動中の列車で発病した場合には隔離するための車両も用意していた。しかし、現地の厳しい寒気（マイナス二六度だったという）に加えて防寒具の用意が遅れた（木綿で顔を包んでいたとある）ことなどもあいまって「益々本病

ノ流行ヲ来シ各部隊ニ蔓延シ漸次鉄道沿線各地南方ノ部隊ニ波及ス十月下旬ニ入り流行愈々猖獗ヲ極メ殆ト第十二師団全部隊ヲ侵襲シ軽キハ数日ニテ治癒セルモ肺炎ヲ続発シテ斃ルルモノ又少ナカラス」という状態であった³⁸。

新型インフルエンザとしてのスペイン・インフルエンザは、肺炎などの激的な症状を伴い、死亡者も多数出た。大量の咯血をして死ぬものも多かった。「其ノ経過ノ迅速ニシテ死亡率高キト高熱咳嗽アリテ血痰ヲ咯出スルモノアル等症状肺「ペスト」ニ類似シアリシヲ以テ大正七年度ニ於ケル流行ノ初期ニアリテハ肺「ペスト」ヲ疑ハシメタリ又地方ニ於テモ同一ノ風説ヲ生スルニ至ラシメタリ」と記されているように、当初は別の病気を疑われることがあった。満州を経由した部隊の場合、中国人居住地区で住民が咯血して死亡する事例が出ているというので、ペスト感染を恐れてここへの偵察をやめるほどであった³⁹。

医師の眼が冷静にとらえる患者の姿は、文字を通してその凄惨さが伝わる。発病した患者は、「入院時既ニ「チアノーゼ」ヲ存シ呼吸促進四十以上、脈拍頻数百二十七以上ニシテ三十九度乃至四十度ノ高熱持続シ意識溷濁シテ中ニハ騒狂状ヲ呈シ叫喚シ或ハ床上ヲ遁去セントスルモノアリ又呼吸困難高度ニシテ窒息症状ヲ呈シ苦悶見ルニ忍ヒサルモノアリ之等重症ノ患者ハ梅毒様漿液性血性泡沫痰ヲ多量ニ咯出シ高度ノ肺水腫症状ト心臓麻痺症状ノ下ニ急速ニ死亡セリ」という状況であった。そしてその中でも症状の激しい「電撃性」と分類されたものについては「百策効ナシ」と絶望的な叙述がなされている⁴⁰。他にも、熱が一度下がったにもかかわらず突然悪化して死亡する兵士がいたことなどが記されている。症状が激烈でしかも手の打ちようがない伝染病に直面したときの医師・看護師・そして患者本人の恐怖は想像に余りあるものがある。

そのような中で、シベリア出兵従軍の軍医はインフルエンザ患者に向き合わせるを得なかった。第一二師団の軍医岡崎武は、その日記に一九一八年一〇月の流行について書き残している。岡崎軍医は、自身もインフルエンザに感染・発病していることを書き記している。そこには、重症患者が死ぬのを見ているしかない医師の苦悩が記されている。いろいろな記述が並んだ中から、インフルエンザ関係の記述を抜き出してみたい。

「伝染病室デハ肺炎患者ガ殖エル計リダ。氣息奄々、既ニ此世ノ人トハ見受ケラレナイ様ニナツテ居ル。喘鳴ハ刻一刻ニ増シテ行ク。食後注射ヤカンフル

注射モ甲斐ナク、脈搏ハ何時絶止スルカヲ危マルル。枕頭ニハ院長ヤ主任ガ遺言ヲ聞イテ居ル。既ニ舌ノ運びモ覚末ナイ」（一〇月一四日）

「病室デハ肺炎患者ガ呻吟シテキルダロー。幾分ナリトモ苦痛ヲ減ラシテヤロー。我々ノ天職ヲ發揮スル時ダ。ドーレ。又食塩注射、撒曹コフェイン注射、ヤレ、カンフル注射、一時ハ効力ガアルラシイガ暫クスルト又カンフル注射スル外ハナイ。斯クシテ刻一刻患者ハ死ニ瀕シテキルノダ。可愛ソウダガ仕方ナイ。天命ナラバ」（二〇月一七日）

「室ニ帰ッテ居ルト間モナク看護卒ノケタタマシイ起シ声、着衣ノママ寝テ居ルノデ、靴ヲ穿ツ間遅シト馳セ着クト遂ニ断末魔ノ苦シミ、様々ノ処置モ不及、遂ニ死ノ転帰ニ終ッタ」（一〇月一九日）

このような記述が一月まで続いている。

また、第三師団にいた軍医日比野勘助は、自費出版したロシアでの見聞録の中に、インフルエンザ流行に苦しんだときの様子を次のように回顧している。

：灰色ノ空ニ朔風ノミ吹き増リ行ク十月末既ニ苦寒迫ルモ此ヲ凌クヘキ防寒具未ダ来ラス時恰モ世界風ノ侵襲ヲ受ケテ日毎増加シ行ク病者ニ砲煙彈雨ヲ恐レサル将士モ今ハ不安ノ念ニ馳ラレ立チ上ル死者ヲ焼ク煙ニ明日ヲモ知ラヌ無情ヲ感ジ病者枕ヲ並ベテ咳声舎内ニ満チ悶々ノ病者床ニ横ハル然カモ顧ミテ慄然タラシムルハ之ニ投スヘキ薬物潤ナラズ斯クシテ病魔ノ犠牲トナリテ、シルカ河畔護国ノ土ト化セシ者三名、日常夜ノ燈火ヲ掲ケス霧不断ノ香ヲ焚カズトハ言ヘ誰カ断腸ノ涙ナラン我等ハ西伯利亞ノ端西スレイテンスクヲ偲ブト共ニ必ズヤ此大ナル犠牲者ニ向ヒ其霊ヲ祭り其魂ヲ弔ハン

追懐其当時ノ記録ヲ緋ケバ病魔邪ニシテ終熄ノ兆ヲ見ズ患者徒ラニ呻吟スルモ頓服以外ノ薬物ナク毎旬其惨状ヲ記シテ大正八年一月二及ブ何等其悲惨ナル!! 恰モ此患ハサル病魔ノ蔓延ニ驚クノ時物資欠乏シテ筆墨用紙片々ノ哀レヲ止メテ其用ヲ為サス此時ナリキ折レタル鉛筆ヲ互ニ争ヒ乾麵麩ノ包紙ノ皺ヲ延ベ或ハ白樺ヲ削リテ其皮ヲ薄メ或ハ読ミ古ルシノ新聞ニ書キ送ル可憐ノ通信ハ如何ニ故山ノ親ヲ驚カシケン、二月三月内地便中通信用紙買葉ノ追送少ナカラサリ

シモ又以テ見ルヘキナリ

多少オーバーな書き方をしている部分もあるかもしれない。だが、気温の低下と病気の流行激化の中で防寒具が到着しないこと、患者の苦痛を和らげる手段がほとんどないこと、そして兵士たちが薬を送ってほしいと頼んでいる様子はリアルである。

このような時代にあつて、各方面ではインフルエンザにどのように対処したのだろうか。次の問題はこのことについて考えていく。

三 どのように対処するか？

インフルエンザの原因について、当時世界的にまだ病原体についての知識はなかった。ファイファー菌(当時の文献では「インフルエンザ菌」「プファイエル菌」などと書かれている)と呼ばれる細菌がインフルエンザの原因であると長い間信じられていたようだが、後述のようにこの説には疑問が提示されていた。細菌より小さなものであろうということ、日本では「濾過性病原体」という言葉が使われていたが、ウイルスの存在は確認できていなかった。とはいえ、病気がある以上、暗中模索の中でも、医師や一般市民はインフルエンザとの戦いを続けていかなければならなかった。本節ではシベリア出兵期に関して、前線と銃後でその様子を概観してみたい。

シベリア出兵の最前線で行われたことは、まずは病状を調べることだったようである。そのために、軍医はインフルエンザで死亡した患者を解剖している。鷹津三郎一等軍医・陸軍軍医学校教官は、第一二師団において、インフルエンザで死亡した患者一名を解剖し、状況を調査している。ここでは、一九一八年一月〇月から一月にかけて、気温の低下とともに感染が拡大し、予後が悪いこと、そして、予備役・後備役の兵士が最も犠牲になっていることを記している。これとは別に行われた解剖例では、肺炎を起こした者、血痰を吐く者は予後が悪いこと、体温上昇との関係は病勢に一致しないことが記されている。いずれにせよ、伝染病で死亡した患者の解剖は、自らも感染することを覚悟した危険な作業にならざるを得なかったはずである。医師はひたすら死亡した患者の遺体を解剖し、肺などの所見を調べ続けていた。

一九一九年冬から、インフルエンザが再び流行を始めた。第一節で取り上げた山口県では、西部の大都市下関市で大流行が発生した。感染拡大阻止のため、下関では市民の有志名義でインフルエンザで死亡した者の遺族は葬式をしないこと、また、葬儀に行かないことを申し合わせるほどだった。市当局は一九二〇年一月末、全市の小学校を一時閉鎖し、緊急予算を組んで市民に向け無償で予防接種を受けさせることにした。⁽⁴³⁾ 予防策も、マスクとうがい、清掃などのほかに、「予防接種」が遂に登場した。

一九一九年の一月に、シベリア出兵の前線では「流行性感冒予防及患者収容二関スル参考事項」が作られ周知された。これは一〇項目から成り、早期受診・衛生の向上、「患者及咳嗽アル者ニ対シテハ手中、紙片等ニテ口鼻ヲ覆フカ如クスルコト又咳嗽噴嚏ニ際シ公衆衛生上飛沫ヲ発セシメサル如ク口鼻ヲ覆ハシムヘキコト故ニ流行地ニ於テハ成ルヘク一般ニ口鼻ヲ覆ラナサシメ且ツ患者ニ接スル者ハ硼酸水等ノ含嗽ヲ行ハシムルコト」、早期の隔離・入院、そして発病した患者については完治するまで体を温めたりすることに努めること、といった、今でも通用する事項であった。⁽⁴⁴⁾ 『西伯利出兵衛生史』には、当時軍隊で作られた簡易マスクの作り方なども残されている。当時のマスクではインフルエンザウイルスを防ぐことは全く不可能であったが、この時点で分かる事ではなかった。⁽⁴⁵⁾

また、激しい咳などの症状が出たことから、「第十二師団第二野戦病院ニ於テハ吸入器ノ不足ヲ補フ目的ヲ以テ磨工ヲシテ鉄板ヲ以テ釜ヲ造ラシメ廊下ニ竈ヲ築キ鉄管ヲ以テ蒸気ヲ室内ニ放散セシメテ蒸気飽和室トナシ咳嗽刺戟強キ患者ハ皆此ノ室ニ収容」するなどのことも行われた。今で言えば部屋をまるごと吸入器にしたということであろうか。⁽⁴⁶⁾ 『西伯利出兵衛生史』を見ると、肺炎の薬として知られていたレミジンという薬を使用したり、中には瀉血までやつたりした事例がある。結局、感染してしまえば、体を冷やさぬようにして個別の症状に対処するしかなかったのである。

前線にいた軍医水野操は、このときの様子をガリ版のニュース『衛生旬報』で記録していた。一九一九年一〇月末から、シベリアの戦線ではインフルエンザが流行をはじめていた。先述の「流行性感冒予防及患者収容二関スル参考事項」が周知されたのは一月ごろからである。⁽⁴⁷⁾ そして、陸軍当局から「インフルエンザ」菌及肺炎菌ノ混合「ワクチン」ハ予防上有効ニシテ反応モ特ニ

考慮スベキ事ナキ旨通牒アリタルヲ以テ」このワクチンを二〇〇〇人分陸軍省医務局に発注し、さらに陸軍軍医学校で開発されたという「流行感冒治療血清」二〇〇〇人分の交付を申請している。⁽⁵⁰⁾ ついにインフルエンザのワクチンが作られるようになり、予防接種の実行が始まったのである。日本国内においても、伝染病研究所や北里研究所をはじめ、製薬会社などが一斉にワクチンを作り、予防接種を始めた。また、国内においては、一九二〇年からのことになるが、新しく徴兵されてきたものに対しては、入営前にインフルエンザの予防接種をすることにになり、陸軍軍医学校が開発したワクチンが用いられている。⁽⁵¹⁾

とはいえ、当時の医学はまだ、インフルエンザウイルスの存在を確認することができていなかった。つまりワクチンとして最初から機能するはずのないものであった。その上、各企業・団体が作るワクチンの内容は全く異なっていた。あげく、伝染病研究所と北里研究所はインフルエンザの原因をめぐって対立していた。⁽⁵²⁾

そのような事態では、インフルエンザ対策に対して懸念する声が出ることは予期できることであった。一九二〇年二月、衆議院でインフルエンザワクチンに関する質問が出た。この質問に立った土屋清三郎議員は、各種のワクチンの内容が全く異なっていることを例に挙げて、「政府が予防注射ヲセヨト奨励シテ居ル一面ニ、此予防注射ニ用キル所ノ薬ヲ見マスルト、斯ノ如ク種々雑多デ、孰レガ真ニ此予防注射トシテ利クモノデアルカト云フコトガ、甚ダ不明瞭デアルノデアリマス」と疑問を呈した。しかし、これに対して政府側は、床波竹二郎内務大臣の名前で「悪性感冒ノ病原ニ付テハ学者ノ意見未ダ一定セサルモ之カ予防ニ関スル注射液ハ何レモ該薬ノ製造ニ使用セル菌種ト同一ノモノニ対シテ予防上相当ノ効果アリト認ム」と冷淡な返答をただけであった。⁽⁵³⁾

一九二〇年七月には、同時代の予防策を全否定し、国立の研究機関を創設せよという意見を提起した議員があった。自身も京都帝国大学の教授だった松下楨二議員は、「流行性感冒予防法研究機関設置ニ関スル建議案」を提出した。⁽⁵⁴⁾ 松下議員は予防接種について、「ワクチン」ノ有効説ヲ唱ヘル人モアリマスケレドモ、私ハ絶対的ニ否認スルモノデアリマス、且ツ之カ為ニ「アナフィラキシー」ト称スル過敏性ヲ起シテ、人命ヲ危クシタリ、或ハ之カラシテ丹毒ナドヲ併発シテ、危篤ノ状態ニ陥マシメタリ、若クハ死亡ノ転帰ヲ取ルヤウナ不幸ヲ見ルノデアリマス」と副作用の大きすぎる危険性を指摘していた。⁽⁵⁵⁾ また、マ

スクについても、ガーゼの厚みなどで効果は異なる、「唯ダ比較的ニ予防シ得ル、病氣ヲ防ギ得ルト云フニ過ギヌノデアリマス」と、理想的な予防法ではない、という意見を述べていた。

しかし政府側の返答ははかばかしくなかった。政府委員として答弁に立った潮恵之輔内務省衛生局長は「政府ハ流行性感冒ノ為メ特ニ研究機関ヲ設ケルト云フ意思ハ持つテ居ラヌノデアリマス」と否定した。伝染病研究所がある以上不要である、というのがその理由だった。松下議員の発言にも、「然ルニ日本ノ医学ハ世界ニ冠タルモノデアラウト思フ、戦前ノ独逸ト比較シテモ、何等劣ル所ガ無い、米國ノ医学ヨリモ優ツテ居ル、ソレデアルカラ研究費サヘ充分レバ必ズ出来ル、所ガ大学ノ研究費ガ幾ラアルカト云ヘバ、御参考ノ為ニ申上ゲマスガ、私ハ丁度細菌学ノ方ヲ担任シテ居リマシタガ、教室ノ費用ハ僅カニ四千円シカ無い」などと、大学への研究予算増額が本来の目的ではないかと疑われるような主張があったのは間違いない。しかし、他の議員からも「昨年来ノ大流行ニ対シテ、殆ド政府当局ハ手ヲ束ネテ居ツタト謂ウテモ宜イ位ノ態度デアッタ」(近藤達児議員)と、政府側の反応の遅さを批判する意見があったのは確かである。

ただ、この委員会のやり取りの中で、当時のインフルエンザ対策が抱えていた問題点がいくらか分かる。一つは病原体が分からないために、予防接種には自信が持てなかったことである。内野仙一防疫官兼内務技師は、予防接種の効果調査について「非常ナル困難、且ツ調査上ニ動モスレバ非常ナル暗点」があることを認めていた。石原喜久太郎伝染病研究所医師・東京帝大医学部教授は、「吾々ノ結果ヲ引括メテ申上ゲマスルト「インフルエンザ」ノ本當ノ病源ハ不明デ、マダ性質ノ分カラナイモノデアリマス」と、インフルエンザの原因を突き止めきれないことを率直に告白していた。

その上、伝染病研究所と北里研究所の見解の相違が、どうやら政治的な対立を巻き込み、防疫体制に支障が出る危険性があったことである。近藤達児議員は、「山口県ノ美祢郡カ、佐波郡カ知リマセヌガ其処デ予防注射ノ為メニ「ワクチン」ヲ準備シマシテ、是ハ伝染病研究所ノ「ワクチン」デアッタノデアリマスガ、其予防注射ヲスル前ニ、県ノ技師ガ出張シテ講話ヲシタ、其場合ニ正ニ注射ニ掛ラントスル時ニ当ツテ、伝染病研究所ノ「ワクチン」ハ副作用ガアツテ、北里研究所ノニ限ルト云フコトヲ言ウタ為メニ、大恐慌ヲ来シテ、其郡長

ハ公文書ヲ以テ伝染病研究所ニ宛テ問合シタト云フ事實ガアル」という事例を紹介していた。政府委員の潮恵生局長はこのうわさを否定したが、うわさが流れているのは認め、注意すべく返答している。⁵⁶⁾

しかし、結局インフルエンザのための研究機関設置は委員会では認められず、「流行性感冒予防法ノ徹底的研究ニ関スル建議案」と改められた建議案が、全会一致ではなく多数決で採択された。このように、インフルエンザは通常の病氣として扱われただけで、それ以後何か動いた形跡はないのである。シベリア出兵の現場でも、軍医などが対策を講じていただけで、結局政治の場に反映された形跡はない。人々は全力で病氣と戦ったが、戦いの結果は政治的な場に反映されなかった。

小括

本論文では、シベリア出兵における一大事件だったはずの新型インフルエンザ流行問題を通じて、シベリア出兵をめぐる諸問題の一端を描き出そうとした。

当時「スペイン風邪」あるいは単に「流行性感冒」といわれた新型インフルエンザは恐るべき猛威をふるった。世界的大流行は容赦なく第一次世界大戦参戦の将兵を殺し、日本のシベリア出兵部隊を襲った。もちろん日本国内においても、全国的に大惨事を引き起こしていった。先行研究が指摘しているように、関東大震災よりも多数の人が死亡したのである。

先行研究が大掛かりに全国的な網をかけて調べたことについて、筆者はシベリア出兵の前線、そして先行研究が手薄になっていると認めていた山口県の様子を中心に見てきた。シベリア出兵の前線と国内はほぼ同時にスペイン・インフルエンザ流行に襲われた。予防接種ができる前の一九一八年冬の流行では、「感染しない」以上の予防法も治療法もなかった。そのために、患者を隔離し、咳をするものを排除し、うがいやマスクを強制的に実行させようとした。一九一九年冬から始まった再度の流行については、当時最新鋭のものであったインフルエンザ予防接種が武器として用いられた。病原体が何なのか現実には全く不明なまま作られたワクチンに予防効果は皆無だった。しかしこれを万能策として実行しようとしたことを責めるわけにはいかなのである。⁵⁷⁾シベリア出兵で、実際の戦闘による負傷者よりも多数の人員がインフルエンザで倒れたとい

う事実も大きい。

ところがこの問題について、結局そのあと政治の場で対策がとられたかと言えはそうではない。日本では少なくとも何の対策も取られてはいなかった。議会の審議でもわかるように、インフルエンザワクチンの効果が怪しいことなどが問題視されても、国家的な研究課題として取り扱うということも行われていない。反面で、伝染病に関する二つの国家機関が、インフルエンザワクチンをめぐって激しく対立したことは知られていた。他の伝染性疾患(史料を見ると、コレラやチフス、流行性脳脊髄膜炎がどの時代も重大な関心事である)のように熱心に研究された形跡がどうもないのである。間歇的に噴き上がる伝染病としてのインフルエンザに継続的な関心もたれなかったのは仕方がなかったかもしれない。内務省報告書は次のように述べて、インフルエンザの研究が暗中模索であり、流行消滅とともに研究が放棄されたことを認めている。⁽⁸⁾

「インフルエンザ」の流行は世界至るところの民族を襲ひ、凡ての社会的階級を冒し、其の罹病率と死亡率と共に頗る大なるを以て、之が予防方を講ずることは全ての国民に向かって焦眉の急務なりき。然れども「インフルエンザ・パンデミー」は久しく其跡を絶ち、其病原の研究も不完全なる儘に放置せられし観ある本病の予防法が突差の間に完成せらるべきの理なく、各国只能ふ限りの手段を採れるに過ぎず。況や今回の流行に際して行はれたる病原の検索は却てプファイエル氏「インフルエンザ」菌に向つて新たなる疑義を生じ、未だ学界の帰趨を確言するを得ざる状態にあり。即ち吾人未だ病原を明に知らざるなり。病原を知らざるが故に其の性状を検査する能はず。其伝染の徑路を詳にするを得ず。従て之を予防杜絶するの途も亦暗中模索を免れざりしは又已を得ざる所なり。

この問題は決して、過去の出来事であるとは考えにくい。治療法や治療薬の効能をめぐって、再び政治的な領域で何かが起こらないとは断言できない。二〇〇九年にわれわれはインフルエンザ・パンデミックを経験したが、この際も、報道や論調がぶれたり、治療薬の副作用に関する議論の可否が持ち上がった⁽⁹⁾。医療技術の進歩を遂げた現代においても、同じような問題が生じないという保証はない。

注

- (1) アルフレッド・W・クロスビー、西村秀一訳『史上最悪のインフルエンザ』みすず書房。邦訳初版は二〇〇四年、新版は二〇〇九年。筆者は新版を用いた。
- (2) 速水融・小嶋美代子『大正デモグラフィ』文春新書、二〇〇四年。また、速水融『日本を襲ったスペイン・インフルエンザ』藤原書店、二〇〇六年。
- (3) 全くなかったというわけではない。杉浦芳夫「わが国における「スペインかぜ」の空間的拡散に関する一考察」『地理学評論』五〇巻四号、一九七七年。
- (4) G.W.Rice and E.Palmer, 'Pandemic Influenza in Japan, 1918-1919: Mortality Patterns and Official Responses', *Journal of Japanese Studies*, Vol.19, No.2, 1993.
- (5) 池田一夫、藤谷和正、灘岡陽子、神谷信行、広門雅子、柳川義勢「日本におけるスペインかぜの精密分析」『東京都健康安全研究センター年報』五六号、二〇〇五年。
- (6) 内務省衛生局『流行性感冒』平凡社東洋文庫、二〇〇九年。復刻本では海外視察報告の章が割愛されている。原書は一九二二年。国立保健医療科学院の図書館サイト <http://www.niph.go.jp/toshokan/koten/Statistics/10008882.html>で全文を参照しきよ。
- (7) 前掲『流行性感冒』四一頁。頁数は復刻版の頁にしてある。
- (8) 秋葉哲生・渡辺賢治「秋田魁新報記事に見る一九一八年から一九一九年にかけてのスペイン風邪流行状況」『漢方の臨床』五六巻二号、二〇〇九年。
- (9) 本来ならば県当局の衛生関係史料も参照しなければならないが、今のところ山口県文書館では、この時期に該当する文書は見当たらないようである。
- (10) 速水、前掲『日本を襲ったスペイン・インフルエンザ』。
- (11) 「山口中学校の臨時休業」『防長新聞』一九一八年一〇月二三日。
- (12) 「流行性感冒」『防長新聞』一九一八年一〇月二三日。
- (13) 「山中の其後」『高千帆の奇病』『防長新聞』一九一八年一〇月二五日。速水氏が先行研究で引用している、東京の新聞『読売新聞』に報道された記事はこの時のことではないかと推測される。

- (14) 「紀伊部長談」『防長新聞』一九一八年一月二七日。なおこの日には「世界病」という記事が掲載され、そこに外電の引用という形で「スペインシユ・インフルエンザ」の文字が出てくる。
- (15) 「各地の流行性感冒」『防長新聞』一九一八年一月二八日。
- (16) 「各地の流行性感冒」『防長新聞』一九一八年一月二九日。結局山口中学校・山口高等商業学校・山口師範学校で死亡者が出た。
- (17) 「何うして感冒を防ぐか」『防長新聞』一九一八年一月二日。他には、安静にして肺炎等の併発を防ぐこと、室内の清潔、寝具・衣類の日光消毒など、今と全く変わらない。このようなものは他県でも出ていた。神奈川県警察部衛生課『大正七、八年大正八、九年流行性感冒流行誌』（国立保健医療科学院の図書館サイト<http://www.niph.go.jp/toshokan/koten/Statistics/10018470.html>）で閲覧可能。原書は一九二〇年）には、神奈川県の出した一三項目にわたる注意が掲載されている。
- (18) 山口県内では、下関市で発行されていた『関門日日新聞』が、社員的大量感染・発病によって一九一八年一月二九日に朝刊の発行ができなくなり、三〇日にはついに全面休刊してしまった。その後もしばらくページ数を減らさなければならなかった。
- (19) 「各地流行性感冒」『防長新聞』一九一八年一月三日。
- (20) 「風邪の影響」『防長新聞』一九一八年一月四日、および「各地の流行感冒」『西班牙風邪には蚯蚓が一番』同紙一月六日。
- (21) 「感冒の行路病人」『防長新聞』一九一八年一月八日。
- (22) 「各地の流行感冒」『防長新聞』一九一八年一月九日。村にいた二人の医師が両方とも倒れてしまったのである。宮野村だけで三〇〇人も患者がいたという。
- (23) 「病人を捨つ 薄情冷血な賄方」『防長新聞』一九一八年一月二二日。徳山の事例。単に感染を恐れただけではなく、病人が宿料を支払えないのではないかと言う打算もあったとされている。逮捕されたのは直接追い出しに携わった賄方だけだったようである。
- (24) 「警察部長通達」『防長新聞』一九一八年一月九日。
- (25) 「宮市天神延期」『防長新聞』一九一八年一月一二日、「山口天神延祭」同紙一月一九日。とはいえ、後者には「此延祭に依り準備期間が永くならなければ祭礼は一層盛んなるべく」という楽観的な一文が付け加えられている。
- (26) 「巡査の死亡」『防長新聞』一九一八年一月六日。
- (27) 「各地の流行感冒」『防長新聞』一九一八年一月九日。
- (28) 「郵便局全滅」『防長新聞』一九一八年一月一八日。結局ここに投入された応援の要員までも感染して倒れてしまった（「各地の流行感冒」同紙一月二八日）。
- (29) 「各地の流行感冒」『防長新聞』一九一八年一月二九日。
- (30) 「臨時防府町会 感冒救助費の可決」『防長新聞』一九一八年一月一四日。この当時、町村制の規定で、二度招集不能の場合は町長の職権で開会できた。ところが今度は治療期間の限定をめぐって議論がもつれた。長期間無料の治療を行わせると、葉価の不正請求をする医師が出る危険性があると議員の一人が発言したため議事が混乱したのである。今は救済をすべきかどうかだけ決めるべきだという意見が出て、予算の配分は町長一任で何とか決着がつくという結果となった。これ以外には、恩賜財団済世会が、貧困層向けの臨時治療券を配布したという記事がある（「済世会治療券」同頁）。
- (31) 中には、任地へ赴く途上で発病し死去したという記事もある（「山村検事の訃」『防長新聞』一九一八年一月二〇日）。
- (32) 「防長新聞」一九一八年一月三〇日。『流行性感冒』によると、一九一八年一月から一九一九年一月一五日にかけて、山口県の患者数は四二八三二九名、死者四四〇〇名であった。新聞の数字はおそらく誇張されてはいない。
- (33) 前掲『流行性感冒』復刻版七三頁。
- (34) 『西伯利出兵衛生史』は、正編と続編があり、続編第一巻に、作成の経緯と編集体制がどのようなものであったかが記されている。各巻が刊行された年は正確には分からないが、一九二〇年から一九二三年にかけて編集・刊行されたことは前述の作成の経緯で知ることができる。所蔵図書館も少なく、完全セットが所蔵されている図書館はほとんどない。本論文で参照するものうち、続編第一巻は防衛省防衛研究所、それ以外の巻は北海道大学付属図書館・北方資料室所蔵のもの。北海道大学のものには、「寄贈

- 編者 早川於都造」の署名がある。
- (35) 『西伯利出兵衛生史』第五卷にある統計数字。
- (36) 山口県立図書館に所蔵されている『明治二十七八年戦役陸軍衛生事蹟』と『明治三十七八年戦役陸軍衛生史』を確認した。発疹チフスやマラリア、脚気や流行性脳脊髄膜炎の記述はあるが、インフルエンザについての章はない。ただし、アジア歴史資料センターの史料を見ていると、日清戦争末期に、中国でインフルエンザが流行したため兵士の派遣を取りやめた事例がある。全く影響がなかったとは言えない。
- (37) 『西伯利出兵衛生史』第五卷、一二七—一二八頁。翌年一九一九年にも流行は再度発生している。
- (38) 『西伯利出兵衛生史』第五卷、一二八頁。クロスビー、前掲『史上最悪のインフルエンザ』によれば、ヨーロッパ戦線に派遣された米軍の中には、明らかに発病しているのが分かっていながらそのまま行軍させられ、高熱に苦しみながら大西洋を越えさせられた経験を持つ者もいたらしい。
- (39) 『西伯利出兵衛生史』第五卷、一三九—一四〇頁。
- (40) 『西伯利出兵衛生史』第五卷、一四一—一四二頁。
- (41) 岡崎頼編著『清寂庵の記』、福岡印刷株式会社、一九七九年。この軍医の日記は、以前拙著『初期シベリア出兵の研究』九州大学出版会、二〇〇三年で用いたことがある。ただ、一〇月一九日の記述の前には、瀕死の患者の治療をした後、酒を呑み、夕食がうまかったという記述がある。どのような逆境にあっても、人は一瞬の楽しみを求めるものである。
- (42) 日比野勤助『鉄路之跡』自費出版、一九一九年。筆者が古書店から購入したものである。本書には、筆者がロシアで見聞したことがスケッチとともに収められているのだが、インフルエンザの記事は巻末になって初めて登場している。ガリ版刷りの冊子であり、大量に作られたものでないことは明らかである。
- (43) 『西伯利出兵衛生史』第五卷、一四九頁以下。この報告は、『軍医団雑誌』九〇号、一九一九年に掲載されたものがそのまま載っている。注四一に出てくる岡崎軍医の看取った死者もこの時解剖に付されている(日記に書かれている名前と、報告に記された死者の姓、死亡年月日の一致で分かる。岡崎は解剖に立ち会っている)。
- (44) 「市内有志の申合せ 公衆衛生のため」および「流感益々猖獗遂に全市全小学校閉鎖」いずれも『馬関毎日新聞』一九二〇年一月一九日夕刊(当時の夕刊は翌日の日付で発行されているので、ここでは実際の発行日で記載している)。
- (45) 「流行性感冒予防液無料注射」『関門日日新聞』一九二〇年一月二三日掲載の下関市公告。『馬関毎日新聞』は翌日掲載している。
- (46) 『西伯利出兵衛生史』第五卷、一七八—一七九頁。
- (47) ちなみに山口県については、マスクの使用が呼びかけられたが「使用者の主なるものは学校児童生徒、官公吏等にして汎く之を實行するに至らず」と消極的な結果であった。『流行性感冒』二二二頁。県当局は人を派遣して予防対策の実施状況を調査したが、「注射は薬液不足のため実行し得ざるは致し方なしとして含嗽、マスクは何処にても実行し得る筈なるに調査報告には百分の一も実行しをらず中には千分の一の町村も少からず、只僅に十分の一位の実あるは小学校位なり、自身を擁護するに斯くも不親切ならんとは呆れ果てたる次第也」(石川太郎山口県衛生課長の発言)と慨嘆する状態だった。「流感下火か 併し油断はならぬ」『防長新聞』一九二〇年一月三一日。下関市の予防接種も「下関では廿三日から流行性感冒の予防接種をやつて居るが何処も此処も注射希望者が少ないので折角取寄た注射液もこの分では篋棒に余るだらうといつて居る/何故注射の希望者が少いかと云へば果して此注射が効力があるか否かが不確実であるかららしい」と不人気だった。「風聞録」『関門日日新聞』一九二〇年一月二九日夕刊のコラム。
- (48) 『西伯利出兵衛生史』第五卷、一八一頁。
- (49) 『大正八年十一月自一日至十日衛生旬報』。これは水野操『西伯利事変従軍日誌』(北海道大学スラブ研究センター所蔵。以下は『水野操日誌』と呼称する)に含まれている。
- (50) 『大正八年十一月自十一日至二十日衛生旬報』『水野操日誌』所収。このとき申請したものと考えられる予防接種液は、一二月に到着し、各地の陸軍病院に配布されている(『大正八年十二月自十一日至二十日衛生旬報』)。
- (51) 『陸軍軍医学校五十年史』一九三六年。筆者が参照したのは、一九八八年、不二出版の復刻版。

- (52) かなりあとの時期であるが、「流行性感冒の病原は依然イ菌で御座る」『読売新聞』一九二〇年一月二〇日などという記事がある。公開の場で論争すべく講演会をセッティングしたときのもの。
- (53) 『帝国議会衆議院議事速記録』二六卷、東京大学出版会、一九八二年。
- (54) 以下のやり取りは『帝国議会衆議院議事速記録』三七卷、東京大学出版会、一九八二年および『帝国議会衆議院委員会議録』二六卷、臨川書店、一九八四年。
- (55) 予防接種に効果があるという意見もあったらしいが、松下議員は、この調査を警察官が行っているため、正直に話せない可能性があることを懸念している。
- (56) 山口県の新聞で、これに類する記事はいまだ発見できていない。ただ、流行が激しかった下関市の新聞『馬関毎日新聞』と『関門日日新聞』が、なぜか「怖しい黴菌が注射液になる迄」という記事を同日（一九二〇年一月二三日の夕刊）掲載している。これは北里研究所のワクチン製造過程を紹介するものである。一般記事のなかにまぎれて掲載されているが、おそらく広告記事であろうと推察される（どちらかの写真が裏焼きになっていることだけが異なっている）。見出しも文面も全く同じである。また、新聞を確認する限り、山口県では概ね北里研究所のワクチンを購入しているようである。伝染病研究所についての記事はあまりない。
- (57) クロスビー、前掲『史上最悪のインフルエンザ』では、アメリカの都市が予防接種開発でいかに希望を感じていたかの叙述がある。
- (58) 『流行性感冒』三七二頁。
- (59) 押谷仁・瀬名秀明『パンデミックとたたかう』岩波新書、二〇〇九年は、今日においても、インフルエンザについて「適切に恐れる」ことの難しさについて語っている。報道などでも、必要以上に脅威を煽るか、逆に「死亡数が少ないから大したことではない」という言説が流されるかのどちらかに傾きやすかった。インターネット上では、「パンデミック虚構説」まですべて流れていたこともあった。

(追記) 本論文は、平成二二年度山口県立大学研究創作助成事業による研究成

果の一部である。この内容については、「山口国際文化学研究会」での発表の機会をいただいた。大学院研究会での発表成果を学部紀要に提出することには躊躇もあったが、学部紀要に書くことを中断させたくなかったことが理由である。御了解を願いたい。また、『西伯利出兵衛生史』や『西伯利事変従軍日誌』の閲覧は、北海道大学スラブ研究センターによる、平成二一年度「スラブ・ユーラシア地域（旧ソ連・東欧）」を中心とした総合的研究「共同利用の公募事業での補助を受けたい」というものである。記して感謝を表したい。

The Problem of the Spanish Influenza epidemic in the time of Japan's intervention in Siberia

IZAO Tomio

The purpose of this article is to explain the relationship between Japan's intervention in Siberia and the Spanish Influenza epidemic.

In Japan, there were many of death caused by Spanish Influenza. At that time, the Japanese Army intervened in Siberia. In this article, the author analyzes the pandemic of Spanish Influenza in Yamaguchi Prefecture, Japan and the frontline of Japan's intervention in Siberia. The author discusses the politics related to the vaccine for the Spanish Influenza that was invented at that time.